

教科書を読む 第2弾 (2-1)

実教出版『高校日本史B 新改訂』(日B13)を取り上げる

この教科書は、かつて黒羽清隆らが、執筆・編集に加わっていた特色ある教科書であった。今回久しぶりに入手することができた教科書は、形も大きくなり(B5版)、見開き2頁で、1つの項目を説明する方針が採用されている。同社発行の『日本史B』とは、見た目も大きく異なる。但し、いくつかの点で、『日本史B』と同様の編集方針が採られているようである。それは、

①導入にあたる部分——『高校日本史B』では、「高校生の歴史探求」——が、充実していること。

②「アジア太平洋戦争」という用語を使用していることなどである。

共通点とは別に、本書では、各節ごとに「歴史のまど」というコーナーを設け、取り上げられている時代のトピックや、内容を深める事柄が記されている。また、各節のタイトルの上に、「〇〇は〇〇なのか」などの疑問文が記されている。これは、以下に記す問題解決型学習を進めることを目標としたものであろう。

1. 導入にあたる部分

まず、「はじめに」として、日本史学習の意義が記されている。そこでは、

(前略)自分たちの常識で考えて『変だなあ』と思うことをできるだけ多く発見し、その疑問を自分たちの知恵で解いていくことです。そして、私たち自身が、自分のもっている常識や経験をもとにして、歴史の真実を自分なりに描きだそうと試みることです。そうしてはじめて、私たちは歴史を主体的に学んだといえるのです

と、問題の発見→探究→理解という問題解決型学習を勧めている。その結果、「21世紀の日本と世界が、『日本国憲法』に示されている平和で安全な民主主義の社会に発展するように、アジアの人びとと、世界の人びとと共生していくためには、私たち一人ひとりが、自分なりの考えをもつことが大切」になると記している(引用はいずれも「はじめに」の頁)。

次に、『高校日本史B』では、上記①で示したように、「高校生の歴史探求」(5~10頁)を設け、問題解決型学習の進め方を例として示している。ここであげられたテーマは「縄文時代の犬はなぜ埋葬されたのか」というなかなか斬新でおもしろいものである。現在、「日本史の中の動物」というテーマは、新たな研究テーマとしてそれなりの蓄積がなされているが、それを受けてのテーマ設定であり、写真や図版を含めなかなかおもしろいものに仕上がっていると考える。確かに、政治・経済・外交を大きくまとめる社会史の括りからは逸脱するものかも知れないが、こういうことを考えてみるのも、歴史の研究では認められ、あり得るのだと生徒たちが感じてくれば、とも思う。但し、この犬をテーマとする導入

学習を指導する教員が、考古学の知識や、先述した研究の理解を深めていなければ、通りいっぺんの方通行的な授業になりかねない虞はあるだろう。

2. 原始・古代の注目すべき箇所

本書もこれまでの実教版『日本史 B』と同様に、時代ごとに注目すべき箇所を抽出し、私なりのコメントを記すことにしたい。本書で「第1編 原始・古代」として扱われているのは12～47頁までで、2つの章に分けられている。

1. 12P	人類が誕生した 500 万年前、……アフリカで誕生した。
2. 12P	野尻湖の月と星 (写真)
3. 13P	また植物性食料も採集した。
4. 15P	狩猟には弓矢のほか落とし穴も用いられ、
5. 16P	南の長江下流域で紀元前 5000 年ころに 水稲耕作 がはじまり、北の黄河中流域ではアワやキビが栽培されて農耕の時代にはいった。
6. 16P	紀元前 4 世紀ころ、水稲耕作が朝鮮半島南部から北九州に伝えられると、紀元前 3 世紀初めには列島西部一帯にひろがり、さらに数十年のうちに青森まで達した。
7. 17P	弥生人骨のなかには、縄文人やのちの古墳時代人に比べて面長な顔立ちで背の高いものがみられる。
8. 17P	河川の流域に親ムラとまわりの子ムラのまとまりがいくつも成立し、それらが巨大集落を中核として流域全体の大きな地域集団 (「クニ」) を形成した。
9. 20P	近年、埴輪の祖型になる弥生時代後期の特殊器台が、この箸墓にもあることがわかった。
10. 20P	墳丘は 3 段階前後に土をもりあげ、段上に埴輪を立てて並べ、段の斜面を葺石でおおった。
11. 22P	中華思想と冊封体制及び、注②の解説
12. 25P	7 世紀になると巨大な古墳はしだいに造られなくなって、東日本でも 7 世紀末には古墳が消滅した。かわって支配者層の間では仏教がとりいれられ、権力の象徴として寺院が建立されるようになり、
13. 30P	「歴史のまど」三韓の調
14. 31P	注④戸籍によって租税収入額や動員兵士数が事前に計算可能となった。
15. 32P	注③天皇号の説明
16. 33P	飛鳥時代の 46 寺がこの時期にじゃ 545 寺に増えたという古い記録の正しさ
17. 33P	百濟から亡命した貴族の影響もあって漢詩・漢文がさかんになった。
18. 34P	「歴史のまど」長屋王邸の発掘の解説及び「長屋王邸の復元図」

19. 35P	都には、約1万人の役人が勤務していたが、
20. 36P	注②逃亡に関する説明
21. 37P	聖武天皇は、恭仁・難波・紫香楽と5年間に3度も都を移した。
22. 37P	初期荘園の経営は、1年契約で農民に田を貸し、収穫の2割の地子をとる賃租方式でおこなわれた。
23. 39P	天平文化の国際性は、歴史書や地誌の編纂にも影響した。遣唐使が唐の宮廷で質問されるのは、日本の風土・産物などであった。
24. 41P	(平城上皇の変、薬子の变)

1. は人類の誕生についての記述である。同社発行の『日本史 B』と同じ記述である。また、同じ頁には「この時代の化石人骨として静岡県**浜北人**や沖縄県**港川人**などが発見されているが、いずれも4万年前以降の新人に属し、身長が低くのちの縄文時代の人々に似ている」と記されている。同様の記述は、三省堂版『日本史 B』(同書2～3頁)や山川版『詳説日本史 B』(6頁)もなされている。さらに、「歴史のまど」として岩宿の発見が取り上げられている。同書は、見開き2頁の中で必ずこの項を持ち、生徒の興味関心を高める努力をしている。これは、かつての『高校日本史』(私が持っているのは、1985年1月発行のもので、日史013である)では、「歴史のひとつま」という項を引き継いだ形で記されていると考えられる。

2. は野尻湖出土のナウマン象の牙とオオツノジカの角の写真である。比較している他社の教科書や実教版『日本史 B』に掲載されていない写真であり、注目される。

3. は旧石器時代の人々の暮らしについての記述。植物性食料が具体的にどのようなものを示すのかの説明がないが、当然のことながら、狩猟だけで食生活が成り立っていたと考えることはできず、この指摘は意味があるだろう。

4. は縄文時代の狩猟に関する説明。同社の『日本史 B』でも、「……これをとらえるために弓矢や落とし穴がさかんに用いられた」(同書29～30頁)と記されている。資料集にはこの落とし穴についてイラストと共に神奈川県霧ヶ丘遺跡の落とし穴群の写真が掲載されているものもある(『新詳日本史』、浜島書店、2006年10月発行、30頁)。

5. は水稻耕作の開始に関する説明。同様の記述は、「中国大陸では紀元前6500～5500年ころ、北の黄河中流域でアワやキビなどの農耕はおこり、南の長江(揚子江)下流域でも稲作がはじまり、農耕社会が成立した」という記述が山川版教科書(同書11頁)にされている。

6. は水稻耕作の広まりについての記述である。教科書によると「前期には」あるいは「弥生前期には」という書き方で稲作の伝播について述べているが、本書では、具体的に時期を記している。山川版教科書ではより詳しく「およそ2700年前と想定される縄文時代の終わりころ、朝鮮半島に近い九州北部で水田による米づくりが開始された。短期間の試行段階をへて、紀元前4世紀初めころには、西日本に**水稻耕作**を基礎とする**弥生文化**が成

立し、やがて東日本にも広まった」(同書 12 頁)と記している。

7. は日本人の起源についてのもの。古モンゴロイドや新モンゴロイドの用語はなく、注でもその記述がされていない。同社の『日本史 B』が想像図であるが絵で理解できるように工夫されていたのと比べれば、やや見劣りする。

8. クニの成立について。同社の『日本史 B』では、39~40 頁にかけて詳しい記述があるが、本書の記述は要領よくまとめられたものである。しかも、「鶴見川流域の弥生集落」の図と説明があり、イメージしやすいものとなっている。

9. は、「歴史のまど」で扱われている箸墓古墳の説明。出現期の古墳として知られる箸墓古墳について特殊壺・特殊器台・壺型埴輪の図と共に掲載されている。

10. は古墳の形状についての記述である。各社共に具体的な説明がされているが、より具体的な記述として注目される。ただ、教師の方では、何故 3 段階前後に土を盛りあげるのか、段上に埴輪を立て並べ、段の斜面を葺石でおおう必要があるのか、の説明をしなければならないだろう。このあたりの説明がわかりやすくできる書として私は、森浩一『巨大古墳』(草思社、1985 年)しか知らないが、より具体的な教師の学習が必要であろう。

11. は冊封体制の説明。取り立てて目新しいことではないかとも思うが、他社の教科書にはない説明である。無論、世界史ではあたりまえの用語であるが、それが日本史では取り入れられずにいたことが問題であろう。

12. は古墳が造られなくなっていく原因について記したもの。通常、群集墳が造られるようになり、そこで説明が終わることが多い。しかし、こうした説明では生徒にすれば、古墳は急に造られなくなったような理解をしがちであろう。以前の『高校日本史』でも、「7 世紀にはいると、支配層のあいだでは、巨大な古墳をつくる風習がしだいにすたれ、かわって寺院が建立されるようになり、仏教文化が興隆しはじめた」(同書 20 頁)と指摘されていた。ここまでのフォローがなされている点は評価できる。

13. は大化の改新のクーデタがはじまった日にちなんだ説明であり、当時の日本と朝鮮の関係も説明されている。比較する際に利用している他の教科書には記述がない。但し、この説明をどのように利用しつつ、乙巳の変を説明すべきかについては、いさかか難しいとも思う。事件の背景として説明すべきなのか、それとも当時の倭の小中華意識の説明として利用すべきなのか、ポイントを絞りにくいようにも思う。これよりも、『高校日本史』の「歴史のひとこま」にあった「豪族の土地争い」(同書 25 頁)か、改新の詔に関する論争「郡評論争」などを説明する方が良いのではないかと考える。

14. は庚午年籍の説明と共に記された戸籍の持つ意味を記したもの。通常、同社の『日本史 B』の注にある通り、「庚午年籍は、氏姓に関する根本台帳として永久保存された」(同書 60 頁)と説明があるが、ここでは、戸籍の持つ意味についてまで記している。この点が生徒にとれば理解しやすいものとなっている。

15. は「天皇号」についての説明である。山川版教科書では「それまでの大王にかわって『天皇』という称号が用いられるのもこのころとされる」(同書 33 頁)とごく簡単な説

明であり、三省堂版教科書は、『天皇』号は中国の影響をうけてつくられたとされている。この教科書では、『古事記』や『日本書紀』などの記述にしたがって、『天皇』号を用いている。しかし、『天皇』の称号がいつからはじまったについては、中国と交渉をもとうとした推古天皇のころから使われたとする考えと、国内で強い支配権をもちはじめた天武天皇のころに成立したとする考えの二説がある」（同書 25 頁）と詳しい。また、実教版『日本史 B』では、「大王にかわって『天皇』の称号が用いられはじめたのは、7 世紀後半以後とする説が有力である。したがって『天皇記』の書名も当時の用語かどうか疑わしい」（同書 56 頁）と記している。『高校日本史 B』は、三省堂版教科書の記述に近く、『天皇』号のはじまりを、遣隋使など推古天皇の時代の外交の場とみる説もある。『天皇』号は、中国の君主や道教思想の影響を受けたと考えられる」と記している。いずれにせよ、天皇の称号は、ある日突然誕生したのではなく、その称号が生まれるにあたり、中国の思想があったことを説明しているのである。これは、それこそ、津田左右吉以来の近代史学の研究の蓄積を踏まえた記述であるが、このあたりの内容を丁寧に確認する必要があるだろう。加えて、天皇がある日突然に、政権を握ることとなったというような理解もさせてはならない。

16. 具体的な数をあげて、白鳳文化の時期に仏教が浸透していったことを示している。しかも、「地方で氏寺を建てたのは渡来系氏族や旧国造などの豪族であった」（33 頁）とあり、この階層に仏教が浸透していったことが理解できる。

17. も白鳳文化の説明の 1 つ。漢詩・漢文の広がり理由は短い文であるが、丁寧に説明されている。こうした説明は、文化が様々な影響を受け、広がり受容されていくことを理解させる上では欠かせない。

18. 長屋王（長屋親王）に関する記述。この項は「奈良の都で貴族はどのような生活をしてたのか」という探究をさせようというもので、その点では長屋王邸宅の詳細な記述や、復元画は有効である。逆に他社の教科書では、ここまでの叙述がされていないから、教科書の比較研究で、対応すべき箇所であろう。

19. は平城京内で勤務した役人の数を提示している。出来上がった律令国家が制度としてきちんと成り立っていたことを理解できる。

20. の注②は「逃亡した農民は、近隣の 5 戸でさがし、郡司が処罰した。一家で逃亡したら 10 日で笞 30、最高刑は徒（懲役）3 年であった」という記述である。逃亡の具体的な処罰内容が理解できる。これほど厳しい処罰であっても、逃亡する人々が後を断たなかったことを理解できる。

21. 聖武天皇の都の変遷について。これをどう理解するかは、なかなか難しい。特に紫香楽宮は、政界の動揺だけが原因かどうかは考慮される必要があるだろう。

22. は初期荘園の賃租の方法を具体的に説明している。この教科書は、きちんと数をあげて説明することがなされていて、具体的な理解がしやすいことが特徴の 1 つである。

23. の記述もおそらく他の教科書にはない記述であろう。日本が中国に遣唐使を派遣すれば、当然、中国側は日本の事柄を質問するであろう。そうしたことから文化理解がされ

るのであるが、このことが示されている。

24. についてはすでに同社の『日本史B』の抽出記事で記した通りである。薬子の変とは言わなくなっている。